

のあるとき、チーロが「水は足りてい

るのか？」と聞いてきた。「運んでやるぞー」となんとも商売が上手い。でも、こっちは助かる。いまでは、肉屋なのに大量の水を車に乗せて二週間に一回ぐらい、宿舍へ運んで来てくれる。

運び終わると「それじゃあー」とだけ言って帰って行く。

車が突然動かなくなったときも、とりあえずチーロに電話すると、知り合という自動車整備工（ほんとうに整備工なのかは不明）をつれて、やって

きてくれる。

調査が終了するまでにお肉屋が潰れないでいて欲しいと思うのは、調査団全員の願いであり、毎年、調査団の到着を心待ちにしているチーロとの関係はある意味プライスレス！

リレー連載

忘れられた当たり前を探す…

目からウロコのフィールドワーク①

ヨバイでつながるタテとエド

田中求

たなかもとむ

東京大学大学院農学生命科学研究科助教（専門は環境社会学）

ヨバイ（夜這い）は、人と人との濃密な付き合いのなかで行われてきた。

一〇年ほど通っているソロモン諸島ビチェ村（図3）の一〇代後半から二〇代の兄ちゃんたちから聞いた話を総合すると、初ヨバイは一〇代半ば、年三〜四回ヨバイに行くようだ。焼畑などの手伝いを頼みやすいのは、ヨバイ相

手であった。あまり目立たないようにしつつも、結婚後も何となく頼ったりしていた。雇用労働も広がりつつある

中で、他者に手伝いを頼みにくくなりつつあるビチェ村では、ヨバイのつながりが活きることもあった。

年に数回、他島から合唱団などが訪れると、村人たちのヨバイ熱が一気に

高まる。合唱団の女の子とは昼間にそれとなく合意が交わされ、取り合いにならないように、兄ちゃんたちの間で事前調整も行われる。そして新たな人のつながりが作られていくのだ。

九月になると、ビルマ（ミャンマー）ラカイン山脈のサラインチン人の村では、陸稲の収穫が始まる。稲穂には先祖の魂が宿ると信じられており、先祖に感謝し、収穫を祝う宴が行われる。宴にはドブロクがたくさん出される。ドブロクが入った壺には、二本の竹製ストローが挿されていて、女性は自分と向き合って飲む男性を指名する



図3 ピチエ村の子供たちと筆者。

ことができる。それはヨバイの誘いでもある。先祖の魂が宿る陸稲の収穫を喜ぶ宴は、新たな命を育むヨバイで終わる。

日本でも、かつてはヨバイが行われていた。私も六〇代以上の村人たちが経験してきたヨバイの話をたくさん聞

いた。相手の親に気に入られないとなかなかヨバイに行けなかったり、相手の村の若者たちの集まりである若者組の了解を得なかったばかりに、追いかけることもあったそうだ。普段の暮らしだけでなく、ヨバイを通じた付き合いからも、その家や家族のことを知り、またそんな情報をみんなで共有しあい、そしてやがて結婚に至っていたとのこと。

ヨバイが廃れた理由については、電気が通ったからとか、アルミサッシの普及で外から雨戸を外せなくなったかなどと言われる。そもそも若者自体があまり村に残っていない。その一方で五〇代以上の未婚男性は珍しくない。村のおじいさんは、昔は若者組が男女の仲を取り持ったり、ヨバイの手伝いもした、もしも今でも若者組やヨバイがあったら、嫁不足も少子高齢化もなかったかもしれない、と話す。

ヨバイは、ただ単なる性的交渉では

ない。フリーセックスでも強姦でもない。そこにはルールや組織、ネットワークがあって、「ヨコ」、すなわち村の中の人と人をつなぎ、別の村や島の人々をつなぎ、労働をつなぎ、さらに「タテ」、すなわち魂をつなぎ、命をつないできた。村の当たり前としての人付き合いの濃厚さ、面倒くささ、そしてそこに暮らす人々の情報を共有することでヨバイは可能になり、またそれを外に開くことで新たな人のつながりが生まれた。

ヨバイの復活を叫びたいわけではない。ただ、ヨバイによって維持されていた「タテとヨコ」のつながり、そしてヨバイを可能にしていた社会のあり方が失われた一方で、私たちはヨバイに代わる「タテとヨコ」を生み出せたのだろうか。ムラの嫁不足だけではなく、いろんな社会問題が生じている根源が、「タテとヨコ」の欠如にあるように思えてならない。